
企画掌編集

壱太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

企画掌編集

【Nコード】

N85350

【作者名】

壺太郎

【あらすじ】

風の吹くまま気の向くまま、乗ったり乗られたり、誘われたり誘ったり、加速するつもりが失速している企画物詰め合わせ。

創作五枚会企画概要

原稿用紙五枚（二千文字前後）に仕上げる掌編企画
路傍之杜鵑氏主催・創作五枚会（<http://gomaiikai.okunohosomichi.net/>）

【第一回】

- ・テーマ／人形
- ・禁則事項／主人公の「」による会話文禁止

【第二回】

- ・テーマ／手癖
- ・禁則事項／登場人物の名前記載禁止

【第三回】

- ・テーマ／退屈
- ・禁則事項？／「？」と「！」の使用禁止
- ・禁則事項？／登場人物の名前の記載禁止

【第四回】

- ・テーマ／静寂
- ・禁則事項／一人称と三人称の使用禁止

【第五回】

- ・テーマ／憎悪
- ・禁則事項／会話文の使用禁止

【第六回】

- ・テーマ／不安

- ・ 禁則事項？ / 名前の記載禁止
- ・ 禁則事項？ / !と?の使用禁止
- ・ 禁則事項？ / 会話文の使用禁止

【第七回】

- ・ テーマ / 歓喜
- ・ 禁則事項 / 心理描写禁止

【第八回】

- ・ テーマ / 光景
- ・ 禁則事項？ / 直喩法使用禁止
- ・ 禁則事項？ / 固有名詞使用禁止

【第九回】

- ・ テーマ / 砂漠
- ・ 禁則事項？ / 擬態法使用禁止
- ・ 禁則事項？ / 擬人法（偽物表現も含む）使用禁止

【第十回】

- ・ テーマ / 幸福
- ・ 禁則事項 / 手抜き禁止

【第一回】 形代（前書き）

- ・ テーマ／人形
- ・ 禁則事項／主人公の「」による会話文禁止

【第一回】 形代

恋をした。

一目惚れだった。

しかし、左手の薬指にある指輪が報われない恋なのだと思はしめる。

それでも彼を思う気持ちは諦めようがなく、少しでも多くの時間を過ごしたくて朝は誰よりも早く出社して部署の机を拭いて回った。美味しいと喜んで貰いたくてお茶を習いに行き、少しでも彼の役に立ちたいと思えば資格も取得していった。

残業を頼まれれば喜んで残って仕事をこなし、雑務も自ら進んで行っていった。

直属の上司である彼が気を揉む事が無いように、他の女性とも当たり障りなく関係を築いていった。

でしゃばり過ぎず、しかし細やかな気遣いは忘れぬように。

そうして、ようやく彼のアシスタントとして隣へ立ち、誰よりも多くの時間を過ごせるようになった。

彼と共に仕事をするようになり、色んな事を知るようになった。

彼の食の好み、ファッションの好み、好みの女性のタイプや所作、仕事の処理の仕方や流れに段取りの好み。

奥様の事や子供の事も。

私は少しずつ彼の好みに合う女へと変わっていった。

髪形、化粧、服に小物、所作も、彼でさえ知らない彼の好む姿へと変わり、彼好みの女になっていく自分が嬉しかった。

彼が好む物は全て私の好む物となり、彼が愛する者は全て私が愛する者となった。

上司と部下との一線は決して越えず、彼の信用を得られるまでになつた。

些細な偶然を切っ掛けに、彼の自宅へ伺う機会があった。

それからは、共稼ぎである奥様とも少しずつ打ち解けていき、たびたび彼の自宅へ伺う機会が巡ってきた。

彼とは休みが異なる奥様に代わり、子供の遊び相手となり姉となり母となった。

会う回数を重ねるごとに家へ上がる機会も増え、私の作る料理で彼と子供と夕食を過ごすようになっていった。

彼の子供は私の手料理を喜び、その子供の姿に喜ぶ彼を見て私は幸せを感じていた。

少しずつ、少しずつ、彼の家が、奥様の台所が、彼らの子供が私の色に染まっていく一方で、少しずつ奥様の気配は薄くなっていった。

ある日の事、珍しくも彼が酒に吞まれて強かに酔った日があった。そのままにしておけず介抱しながらさり気無く聞いてみれば、奥様の浮気が原因であった。

管理職へと出世してからは更に仕事へと打ち込み、家庭を顧みない日が続いていた。

その事で、幾度と話し合いをしてきたがいつも喧嘩となつてしまい、解決には至らないまま遂には奥様が家を出てしまわれたのだ。

不甲斐無いと涙を流す彼を見て私は悲しかった。

愛する男の悲しむ姿を見て、どうして慰めずにいられようか。

私も涙を流しながら気付けば彼を抱きしめていた。

私の体で彼の心が慰められるのであれば、私自身が望む事ではあるけれど、今ベッドを共にしては後々彼に迷惑が及んでしまう。

だから私は彼の誘いを断った。

それから暫くして、彼は奥様と離婚をした。

離婚した直後は幾らか荒れていた彼だったけれど、徐々に落ち着

きを取り戻し本来の彼へと戻っていった。

その後も私は彼のアシストとして公私に渡り傍に居続けた。

この頃からか、彼の子供が体調を崩す事が多くなった。

元々気管の弱い子供でまだ母親の手が必要な年頃。

更には、親の離婚の一因が自分にあると見当違いにも悔いてた子供は、心を弱らせ、そして体を弱らせていった。

女手を必要とする彼の家に訪れては、子供の面倒を甲斐甲斐しく見て、仕事から戻った彼へ用意した料理を振舞うのは私の喜びでもあり、彼が私に愛情を抱くのも当然の成り行きだったと思う。

そこに打算が無かったと言えば嘘になる。

私は未だに彼を愛しており、色褪せぬ思いを抱き続けながら、彼が私に愛情を抱くよう出会ってからずっと願い、そうなればと努めてきたのだから。

そして、彼と初めて出会ってから十年の月日が経ち、私は愛する彼と結婚した。

私は具合の悪い子供の様子を見に夜遅く子供部屋へ向かう。

静かに歩み寄り、浅い呼吸を繰り返す子供を暫く見下ろしてから、そっと布団の中から子供の手を取り引き寄せる。

そして額からこめかみ、頬から首へ、そして肩、腕、胸、腹と子供の手で順番にゆっくりと私の体を撫でていく。

穢れを払い給え、穢れを払い給え、穢れを払い給え、と願いながら。

一通り撫で終わると掴んだ子供の掌に息を三回吹き掛けて、再び布団の中へと戻してあげる。

彼の家に招かれ泊まるようになってから、あの人と結婚してから毎晩欠かさず続けている行為。

私の穢れや災いをこの生きた形代へと移し続けている。

この形代が本当の形代になった時、彼の妻であった女への憎悪も、

浮気を唆した罪も、忌々しい女の血を引くこの子供の存在も、全て業火に焼かれ清められる。

そうすれば、私は晴れて本当の彼の妻となり、愛する男との子供を持って幸せになれるのだから。

だから早くその体を焼いて、私の穢れを清めて頂戴。

【第二回】 無癪（前書き）

- ・ テーマ / 手癖
- ・ 禁則事項 / 登場人物の名前記載禁止

【第二回】 無癪

彼は髪を纏め上げている女が好きだ。

特別長くなくても構わない。

纏め上げられるだけの長さであれば、それだけで彼の中ではその女への好感度は上がる。

髪は下ろさず常に纏め上げている事を彼は密かに悦ぶ。

常に笑顔で話題も豊富、そして女受けする容姿を持つ彼の周りは男女問わず人が集ってくる。

男友達に彼の事を問えば、友情厚く面白くて好いヤツなのだと返ってくるだろう。

女友達に問えば、その容姿も然ることながら、マメな性格ゆえに恋人であればと望む声が返ってくるだろう。

現に彼がフリーである期間は常に僅かだ。

彼はとても彼女を大事にするのだが不思議と長続きはしない。

女に人気はあるが決して女癖が悪い訳ではない。

しかし、彼の隣に寄り添っていた彼女はいつの間にか消え、そして時を置かずして新たな彼女が隣にいる。

男女分け隔てない彼のマメさが原因で、喧嘩別れに至ってしまうのだろうかと友人たちは憶測する。

人付き合いの良い彼に、今度こそ理解ある彼女であれば良いのにと、新たな彼女と共にいる彼を見てはそう話すのだった。

そんな彼に新たな彼女が出来た。

染めずにいる黒い髪は重く見え、乏しい表情を更に眼鏡で隠す女は見目の良い彼と並ぶとより一層地味に見えた。

だが、周りの友人達の予想に反し、この地味な女は今までの彼女達の誰よりも長く彼の傍にいた。

彼女と共に友人達との付き合いに参加する彼は、男友達には良い彼女と巡り会えたなと冷やかされ、女友達たちは彼と長く付き合っているコツを彼女に聞きたがった。

そして、友人達は彼らの結婚はいつ頃なのだろうかといった話題を口にする事が多くなつたある日の事、堪えきれなくなつた女友達の一人が彼女へ問い掛けたが、彼女はただ表情を強張らせながら曖昧な笑みを浮かべるだけであつた。

男からも女からも好かれる彼氏を持ちながら、誰よりも長く彼女であり続けながら、今なお不安なのだと言だけを返して口を噤んでしまつたのだ。

あれほど出来た男を誰よりも長く掴まえておきながら、何を不安に思うのかと一同は笑つたのである。

母であつた女は、自分が産んだ子を四六時中建て付けの歪んだ押入れに閉じ込めていた。

子は母が襖を開けてくれるまで只ひたすら大人しくしている。

そうしなければ、母に手酷くぶたれるからだ。

だから、子はただ大人しく大きく見開いた目を押し付け、歪みで生じた戸の隙間から母の全てを見続けていた。

子が押入れに閉じ込められる時は、必ず父親以外の男がやってくる。

普段は髪の毛の乱れも感じさせない厳しくも清楚とした母が、訪れた男の手によつて髪留めを外され、流れ落ちた黒い髪をあられもなく乱しに乱す様を、子は瞬きも忘れてずっと見続けていた。

その日も母の髪留めを外しに男は訪れてきたが、突如現れた父によつて全てが無となつた。

母の髪に指を絡ませ乱していた男は、白かつたシャツを真っ赤に染めて横たわつたまま。

泣き叫ぶ母は父の手によつて、掴まれた髪を振り回され乱されて

いた。

そうして父は、母の細く白い首に節くれだった太い指を絡ませる。その全てを子は瞬きもせずに見続けていた。

その日を境に母は姿を消し、子は父と共に住まいを転々とするようになる。

やがて大人になった子は母の顔を全くと言っていいほど思い出せなかったが、どれほど時が経とうとも髪留めを外され流れ落ちていく母の髪と、父の指が絡んだ細い首だけは克明に思い出せた。

父に縋っていた細い手が徐々に徐々に力を失い落ちていく情景は、父の腕に痕を残していった爪は、最高の快樂の印として子の脳裏に今なお強く焼きついている。

男は恋人を愛していた。

恋人であった女達も、男から深く愛されている事は感じていた。

その愛が次第に恐ろしく感じるようになったのはいつの頃からだろうか。

付き合いだした当初、髪を留めている姿が好ましいと告げられ女は喜んだ。

髪留めを外した時に見せる男の笑みを嬉しく感じていたのに、節くれだった指で髪を梳かれる事を甘やかに感じていたのに、薄気味悪さへと摩り替わったのはいつの頃からだろうか。

喉元撫でる指を心地良く感じていたのに、肌を重ねるたびに首へ添えられた指へ力が籠るようになったのは、息苦しさにと詰めてと訴える事が増えたのはいつの頃からだろうか。

どの女よりも長く恋人であった地味な女は、変化を好まず常に同じ髪型で満足していた。

また恋人である男もそう望んでいたから良しとしていた。

生まれて初めての恋人である男から深く愛される喜びを知り、そして心変わりを恐れていた女は男の腕に爪を立てていた手を遂に力

なく垂らしてそのまま動かなくなってしまふ。

「ああ……無くて七癖とはよく言ったもんだが、この手癖にも困ったモンだなあ。直そうと気をつけているのに、なかなか直らないものだなあ」

思い出に残る、父とよく似た節くれだった自分の手を見下ろし、そして腕に残された爪痕を見て男は恍惚としながら笑った。

【第三回】 書の冗談（前書き）

- ・ テーマ／退屈
- ・ 禁則事項？／「？」と「！」の使用禁止
- ・ 禁則事項？／登場人物の名前の記載禁止

【第三回】 書の冗談

「ねえ、君。ちょっとコレを読んでみてくれないかな」
友人がそう言って差し出したのは、四〇〇枚はある『書の冗談』
という題の原稿だった。

きつと小説を書いている僕に影響を受けたのだろう。

彼とは高校からの付き合いで、大学は異なったが卒業後もこうして付き合いが続いている。

天才肌である彼は他人との付き合いを厭い、社会人になった今も続いている友人は、友人と呼べる人間は僕くらいだろう。

家で仕事をして外に出る必要のない彼は、殆どのことを器用にこなすが家事と整頓だけは大の苦手なのである。

半ば引き籠もりと化している彼が心配で、僕は時折こうして彼の家に訪れては散らかった部屋を片付けてあげたりしていた。

そんな彼から渡された原稿を読んでもみると推理物らしく、第一の殺人は痴情の纏れと思われたが第二の被害者が出る。

第一の殺人で居合わせた探偵が解決に挑むも、力及ばず第三の殺人が起こってしまう。

僕が犯人と目星を付けた人物を、探偵が賛同してくれるかのように話が進む。

胸の内ではあたかも探偵と意見を取り交わしているかのような錯覚を覚えながら、頁を捲れば容疑者は殺されて犯人に出し抜かれる探偵の悔しさを共感するのだ。

そして、最後には物語の語り部でもある探偵が犯人であったというどんでん返し。

原稿四〇〇枚の中で培ってきた探偵との信頼を裏切られたかのような焦燥感。

僕をここまで惹き込んでおきながらの手酷い裏切りに、彼はなんて凄いい話を書くのだろうかと打ち震え、彼はやはり天才なのだと感じ

嘆し、そして日の目を見ない僕の小説を省みて詮無い嫉妬を燻らせた。

一気に読み終えて気の抜けていた僕に、彼は淹れ立てのコーヒーを手渡しながら感想を求めてきた。

「これが処女作とは、とても思えないよ」

僕は勢い込んで素晴らしい作品である事を伝えたが、しかし彼は堪えきれないとばかりに腹を抱えていきなり笑い出す。

訳の分からない僕は、彼の馬鹿にしたような笑いが収まるまでただ呆然と待つしかなかった。

「面白いつて。こんなつまらない、退屈な話を面白いだなんてなあ。だから君の話はいつまで経っても認められないのだね」

彼は蔑む眼差しで原稿を見つめ、鼻白んだ様子で口にする。

「な、何だよ突然」

「これを読んで、君の話に似ているとは思わなかったのかなあ」

彼は原稿用紙から戸惑っている僕へ、その蔑む眼差しを向けて問う。

「確かに以前に書いた僕の話に似ているが、それはキミが初めて書いた小説な訳だし、いつも読んでいた僕の話に影響を受けたとしても……」

戸惑いながら答える僕を遮り、彼は鬱陶しげに片手を払う。

「勘弁してくれ。君の影響なんて受けようがないよ。君の書く退屈な話をただ真似ただけなのに」

「え……」

「まあ、気付いていたら面白いなんて言うはずないか。そうだよ、退屈なんだよ。推理物では謎解きまでの間に退屈さが生じるのは止むを得ないさ」

彼はそこで言葉を切ると未だ呆然としている僕を見て、鼻で笑った。

「だから、君の話は退屈しか無いって事。推理物を退屈に感じるのには必要な裏づけの地道さ故だが、その後の爽快な謎解きが全ての退屈を許してくれる。なのに君の話は、単に容疑者の話を聞いて回っているだけ。爽快な謎解きさえもない、記録を綴っているだけの退屈な話ばかりだ。探偵が犯人なんてのも荒唐無稽だし、まともなトリックもない。捕まらないのも都合の良すぎる運の良さときたものだ」

言うだけ言ってスッキリした様子の彼は、肩を竦めると湯気が立つコーヒーを啜る。

「そんな……」

打ちひしがれた僕は喘ぐだけで、彼を詰る言葉さえも続かない。

「君にとつて友人はボクしかいないようだから、いちおうは遠慮はしていたけど、君の小説にだけは本当にうんざりなんだ。これまでそれとなく伝えてきたつもりだったけれど伝わってないし、君の話を真似て書いて見せれば気付くかとも思ってたけれど、それにも気付かないんじゃないよお手上げだよな」

コーヒーの香りに満足そうな笑みを浮かべた彼が僕を見る。

「君の話は退屈そのものだから、金輪際読ませようとは思わないでくれよな」

悪意にも似た笑みを浮かべる彼の瞳に、涙を流している男が映っていたように見えた。

目の前にあったコーヒーを、僕は発作的に彼へ投げつけていた。熱いコーヒーを浴びて悲鳴を上げる彼に僕は飛び掛かり、今まであえて気付かぬ振りをしていた、彼への妬みを憤りに乗じてぶつける。

気が付けば物言わなくなつた彼の顔を、口汚く罵りながら蹴り続

けていた。

碎ける音で我に返り、いい加減足の裏が濡れて気持ちが悪い。ふと正面を見れば本棚の扉に嵌められたガラスに高揚した様子で笑っている僕が映っていた。

こんなに面白い小説が退屈だなんて彼はどうかしているんだ。

そうだ、近々ある賞に応募してみよう。

そうすれば、面白いか面白くないかハッキリするのだから。

そう思って応募した『僕』の作品は、特別賞として入賞を果たした。

ザマアミロだ。

やはり『僕』の小説は面白って事がこれで証明されたんだ。

選考委員特別賞『書の冗談』

素人が陥り易い破綻した構成と思いきや、未熟さを演出し逆に皮肉る内容は選外とするには惜しく感じられる。

推理小説としてはありえない結末は、未熟な作家への痛烈な皮肉で高慢そのものである。

しかし、推理小説と言い難いこの奇作は選考委員全てを唸らせた完成度の高い作品であるため選考委員特別賞とする。

【第三回】 書の冗談（後書き）

参考としたもの

音楽の冗談

<http://p.tl/kcfm>

【第四回】 落椿（前書き）

- ・ テーマ / 静寂
- ・ 禁則事項 / 一人称と三人称の使用禁止

【第四回】 落椿

おや、雪が。

こんなに積もっているは帰るに帰れませんなあ。

お家はどちらで？ ほお、そんな遠くからとは……そうすなあ。急ぎ帰る必要なければ一晩泊まっていかれてはいかがです？

いやあ、迷惑とは申しませんがねえ、ですが旦那さん。

ご覧の通りここは賑やかとは言いがたい町でございますし、碌な宿はございません。

この調子じゃあ、まだまだ降りましようし、このまま店を出られましても足も拾えず今から歩いて駅に向かった所で閉まっておりますでしょうから、おっつけ朝には凍死体が一丁出来上がり……へえ、困った時はお互い様と申します。

家族でございますか？ 気楽な独り身でございますまして、道楽が高じて住まいに手を加えて小料理屋をやっております。

訪ねて来るモンもおりませんで、侘びしい所で今夜は雑魚寝となりますがご勘弁下さいな。

温まった体がまた冷えちまいますから火鉢に寄つてておくんなまし。

炬燵も直に暖まりましょう。

何せ男鰥夫おこやもめでございますんでご覧のようにとっ散らかっております。

綺麗に片付いておりますか？ はっはっはっ、ありがとうございますます。

先に暖簾を下げてまいりますんで、ちよいと失礼致しますよ。

寒うございませんか？

しかし、雪が降っていたとは驚きましたねえ、道理で芯が冷える

と思いましたよ。

体を温めるにはコレが一番でございますからね、どうぞお付き合
い下さいな。

ほお、泊めてもらうだけでも十分と。

仕事引けて一杯やるのが爺の楽しみでございますが、語らう相
手が目の前にいるってえのに独りでやれとは釣れないじゃあござい
ませんか。

ええ、遠慮はどうぞ無しにしてください。

まあ、まずはご一献。

火鉢でぬる爛つてえのもたまには良いもんでございましょう。

旦那さんも良ければこちらの餅も、あたりめも焼けておりますよ。
くちいておりましたらこちらをどうぞ。

へえ、蜜柑でございます。

こうして皮を剥いて一房ずつ炙ってやりますと甘みが増すんでご
ざいますよ。

所で、旦那さんはさっきから何を熱心に……雪見障子が珍しゅう
ございますか？

椿でございますか。

闇の中で音も無く深々と降る雪に赤く咲いた椿は赴きあると。

ははあ。旦那さんは、詩人でらっしゃいますなあ。

いやいやあ、からこうではおりませんよ？ 顔が笑っている？

元からこんな顔をしておりますんでなあ。

あの椿がやけに赤く見えるので魅入つてらっしゃったんですか。

成る程。雪のせいもあるのですが、この椿は明るい赤という
よりも真紅のような少し黒みのある赤色をしておりましてね、名を
黒侘助と申します。

昨日、硬かった蕾が開いたばかりなんです
落ちましたなあ。 ああ、一つ

おっと、少々ぼんやりしちゃいましたね。
火が爆ぜましたが飛んじやおりませんか？

雪は音を吸いやがりますから、ついつい時が経つのを忘れてぼんやりしちゃいます。

酒と肴は売る程ございますんで、遠慮なさらずに。ささ、もう一杯。

ああ、旦那さん。これは、塩じゃあございませんよ。

塩でなければ何だと？ 気になられますか？

これは

女癖の悪い男と理^{わじな}無い仲であつた馬鹿な女の骨でございます。

死んだ女が焼かれた後、寺へやらずに骨を砕いてこうして毎晩少しずつ飲んでいるんでございますよ。

女が逝つた夜、男は他所の女ん所におりましてねえ、丁度その庭先にあつた椿も蕾が開いたばかりだつたつてえのに、さっきのように一つだけ落ちましてなあ。

.....

旦那さん。旦那さん？ 寝ちまつたんですかい？

聞いておきながら、落ちも聞かずに寝ちまうなんて酷い旦那さんだねえ。

そう思わないかい？ お前もそんな所に突つ立ってないで、こちらへおいでな。

全く馬鹿な女だよ、お前は。

どこの唄に見立てて、互いの身を錆び刀と言つたのはお前だろ
うが。え？

なのにこの世だけで満足たあ何事だい。

お前が小町と謳われた頃からの付き合いで、互いに添うでもなく
所帯も持たぬまま気付けば共に白髪頭だ。

今更、誰に遠慮や気兼ねをする必要があるんだい。

六文銭持たせずに送ってやったからなあ？ お前、船に乗れず難儀したろう？

なあに、お前の分と合わせて十二文、俺がくたばった時に持ってやるから共に川を渡ろうじゃないか。

河原で待ち惚けした愚痴は船で聞いてやらあ。

脂下がった顔をするんじゃないよだと？ 元からこつという顔なのは百も承知だろつが。

何が手厚く葬れた。

焼いたお前を粉にして、酒で飲めば行く行くは墓の中まで懇ろよ。お前、何を嫌そうな顔してやがる。

共にもう一度焼かれて供養されりゃあお前も嬉しかろつ？ あ？ 錆びた刀じゃ切るに切れぬ腐れ縁、ここまできたなら二世も三世も添うてみようじゃねえか。なあ？

本当に馬鹿な女よ、お前は。

昨日や今日の付き合いじゃあるまいし、ちいつとは察してもっと早く迎えにきやがれってんだ。

まあ、互いに急ぐ用もねえ。

お前好みの爛ができたよ。

これ一本、お前の好きな佗助を肴にとっくりと眺めてからあ逝こつじゃないかい。なあ？

【習作】 衣の重さ（前書き）

- ・ テーマ / 静寂
- ・ 禁則事項 / 一人称と三人称の使用禁止

【習作】 衣の重さ

ここはアナタの罪を計る場所です。

アナタがどの様な罪を犯したかを克明に調べる場所です。

アナタの纏う衣服をこの木に掛けて、アナタの罪や業を計ります。今しがた渡ってきたばかりの川は荒れに荒れて波を幾度と被り、水に濡れて重くなった衣服で罪を計るとは理不尽だとアナタは訴えました。

では濡れた服のかわりにアナタの生皮を剥いで計りましようと言われ、その恐ろしさに結局は濡れた衣服で罪を計る事にアナタは承服せざるを得ない。

濡れた服を一枚、そしてまた一枚と掛けられる様子を、アナタは戦々恐々としながら見ている。

なぜなら、衣服を掛けられた枝の垂れ下がった度合いで、これからアナタが向かう場所を決められてしまうから。

濡れた一枚の衣服で垂れ下がった枝は、生き物の命を奪ったとアナタを糾弾しますが、アナタは殺した虫は害虫であり止むを得なかったのだと訴えます。

しかし、止むを得ずの殺生でも懺悔は疎か、嬉々として殺生した事もあると枝に告げられ、心当たりのあるアナタは黙ってしまふ。

幼き頃、好奇心ゆえの残酷さで虫を殺していたのは確かであったから。

二枚目に掛けられた衣服で更に垂れ下がった枝は、脅えるアナタに盗みを繰り返したと罪を露にします。

仕事にもありつけず食うに困っていたからとアナタは必死に弁明しますが、食うに困っていないくとも悪戯に万引きを繰り返していたと告げられ、再びアナタは黙ってしまふ。

三枚目の衣服を掛けられ更に下がった枝はアナタがいかに淫らな行いを繰り返して楽しんでたのかを知らしめます。

みんながしていた事だからとアナタは言い返しますが、四枚目の衣服を掛けられ垂れ下がった枝は、酒に毒を混ぜて悪戯に人を惑わせた事を暴いてしまう。

そして、最後の衣服を掛けられましたが、アナタは頂垂れてその様子を見る事ができません。

どう言い訳しようともその弁解が通らないから。

訴える情状が薄っぺらな事をアナタは理解しているから。

だから、もう垂れ下がる枝を見る事が出来なくなってしまった。

枝はアナタの悪意ある嘘で争いが起きた事、アナタの悪意ある嘘で死を選んだ人がいる事を曝け出しますが、アナタはその事実を得意な嘘を以て否定する事はできませんでした。

なぜなら。

今アナタがこの場所にいるのは、アナタのついた嘘によって傷ついた人が、恨んで復讐を果たすべくアナタを殺したから。

アナタの罪は計られた。

アナタがこれから向かう場所は、大叫喚という場所。

熱湯滾る大釜や猛火の鉄室に入れられて、叫び喚なきながら852

兆6400億年という時間をアナタはこの場所で過ごす事になる。

【第五回】 その先（前書き）

- ・ テーマ／憎悪
- ・ 禁則事項／会話文の使用禁止

【第五回】 その先

時折、憎悪とは何であろうかと考える。

また、憎悪を維持し続ける事について。

憎悪について考える切っ掛けとなったのは、友人を通じて知り合った女性である。

彼女は際立つて美しい容貌をしている訳ではなかったが、ふとした折に目を引く女性であった。

物を取る時の指の動きや立ち振る舞い、ピンと伸びた背筋と所作の美しさに自然と目が引き付けられた。

初めて会ったのは友人と酒を交わしている時で、偶然近くにいたからと急遽仲間に加わって酒を飲み交わした。

彼女とは互いの職場が思いのほか近く、それから暫しの時を経て再び偶然に街で出会い三度の偶然を迎えて以降、彼女とは思い出した頃に酒を、時にはお茶を飲み交わす仲へとなった。

あれは職場近くに美味しい喫茶店を見つけたからと彼女からの誘いを受けた日である。

仕事を終えた帰りに待ち合わせて寄った喫茶店で、互いの近況などを話しつつ珈琲を楽しんでいた時であった。

ふと言葉が切れて動きの止まった彼女を怪訝に思い、その視線の先を見てみれば、己の祖父母を惨殺した青年のニュースがテレビで流れていた。

あのニュースがどうかしたのだろうかと再び彼女へ視線を戻すと彼女は艶やかでそして目を背けたくなくなるような歪んだ笑みを浮かべていたのだ。

実際に目を背けてしまった私に気付いた彼女は、取り繕った笑みを浮かべて謝った。

彼の青年は彼女の産んだ子供で、殺された祖父母は嘗ての夫の両親であると教えてくれた。

悲痛な出来事だというのに、なぜ彼女が笑っていられるのか戸惑っているとは実は　と話し始めた。

彼女の話はこうであった。

嘗ての夫が憎くて憎くて仕方がなく、その憎しみをどうしても抑える事ができずに結婚をしたのだそうだ。

なぜ、元夫をそこまで憎んでいたのか、理由を尋ねてはみたが儂げな笑みを浮かべただけで答えてはもらえなかった。

それ以上は尋ねられず、今をもって理由は不明のままである。

しかし、夫婦となった以上は当然に肌を重ねる事もあるだろう。現に彼女は憎い相手の子を産んでいる訳だ。

憎しみを抱く相手と肌を重ねる事など可能なのだろうか？　少なからずの好意があつたのではなからうか？

そう不思議に思う私に彼女は、それも憎しみの糧となるのだと言つた。

寧ろ彼女は憎し男の子供を産む事を望み、そして叶つた。

無事に産まれた子供はすくすくと育つ。

子供が乳離れをすると彼女は早速仕事を始め、その留守の間は子供を憎い男の両親に預ける。

彼女は我が子、いや憎い男の子供を一度たりとも叱つた事はなかったそうだ。

子供の望むままに物を与え、望むままに言う事を聞いてやる。

彼女は母ではなく、従者のように子供に付き従つた。

子供の祖父母とて、可愛い初孫の我儘を嬉しそうに叶えてやっていた。

誰一人、子供を躰けてやる大人はいなかったのだ。

そして彼女は子供が小学生へ上がるのを期に離婚を申し出て、単身で家を出たそうである。

それ以降、彼女は夫にも子供にも会つてはいなかったが、状況だ

けは全てを調べさせていた。

全てを妻任せにしていた嘗ての夫は、それまで以上に家庭を顧みなくなつた。

男の親とて母に見捨てられた子供は腫れ物であり、ますます子供を叱る機会を失う。

子供はやがて傍若無人な振る舞いが当然となつて、望みが叶わなければ癩癩を起こし手を上げる。

暴虐非道に拍車が掛かる子供に対し、男の両親は子供の望みを無限に叶えるという悪循環。

彼女はその綻びがいつ決壊するのかと、心待ちにしていたのだ。うだ。

そして、あの日のニュースで漸く彼女の望みは一つ叶つたのである。

彼女曰く、子供は復讐の道具であり、子供として愛情を抱いた事など一度もない。

道具が彼女の望む道具としてあそこまで育つのは運であつたと言う。

運が良かったと彼女はその時、笑つて言った。

彼女は、自分の人生の十数年を代償に、男の子供を祖父母に預け、うんと甘やかし育てるといふ復讐を選んだ。

一度も叱られた事のない子供がいずれ引き起こす何かを期待して、己の手を汚さずして男の人生を潰す為だけに。

あの日、喫茶店で会つた日を最後に彼女とは疎遠である。

憎悪とは何であろうか。

私には、彼女のように憎悪を十数年も抱え続ける事などはできない。

逆に、どのような事情があれば彼女のような憎しみを抱えて生きていられるのだろうか。

嘗ての夫は彼女へいったい何をしたのか、彼女を思い出してはその起因を想像する。

もし仮に、私が誰かに憎悪を抱いたのならば、その瞬間に手を下さずにはいられないだろう。

目の前で藻掻き苦しむようなものが良い。

そう例えば毒とか。

このご時世、金を出せば何かと都合がついてしまつ便利さなものも考えものだと思つ。

私は考える。

憎悪とは何であろうかと。

そうして私は今夜も、愛する妻のため特別に挽いた珈琲を淹れてやるのだ。

【第六回】 新世界（前書き）

- ・ テーマ / 不安
- ・ 禁則事項？ / 名前の記載禁止
- ・ 禁則事項？ / !と?の使用禁止
- ・ 禁則事項？ / 会話文の使用禁止

【第六回】 新世界

俺は今、とてつもない緊張と興奮と、そして不安に苛まれている。こんなに緊張したのはいつ以来だろうか。

中学で初めてサッカーの試合へ出た時も、ミスをしなにか不安だった事は今でも覚えている。

センター試験の時にも確かに緊張はした。

でも、かつての緊張も不安も、今この瞬間に感じているほどではなかったように思う。

ああ、それにしても。

俺は落ち着けと、心中では納まらず口に出してまで自分に言い聞かせながら、部屋の中をウロウロとしては椅子に腰掛け、そして激しい貧乏揺すりをしている自分に気付いては再び部屋の中をウロウロと歩き回るといふ事を繰り返している。

いっその事、酒を少し飲んでしまおうかとも思うが、今飲めば絶対止められない自信がある。

酒は駄目だ。

ならばタバコはとも思うが、こちらも止め処なく吸い尽くしそうでは手を出せない。

一本二本で済むのであれば良いが、吸殻で山となった灰皿はいただけない。

やはり今吸うべき時ではない。

俺は深呼吸を繰り返して、再び椅子へ腰を下ろす。

この作業を三十分もの間に四度も繰り返していた。

何事にも『初めて』という物には、多かれ少なかれ緊張や不安がついて回るだろう。

しかし今回の『初めて』は、俺にとって人生を大きく左右してし

まうかもしれない『初めて』なのだ。

失敗は許されない。

失敗をしてしまえば、俺は二度と立ち直る事が出来ないと思う。

一生負け組のまままでいてしまうような気がして、とてつもなく不安なのである。

よし、落ち着け俺。

もう一度おさらいだ。

座ってた椅子から腰を上げ、直ぐに下ろし、そして立ち上がる。

もう一度座って何度か頷いた俺は、何度となく反芻してきた流れをもう一度繰り返す事にした。

おおよその流れは問題なく理解できている。

万が一、有事が発生した際には大人しく引き下がれ。

怪我をしては元も子もないからな。

そして肝心なのは。

そこまで反芻していた所でノックの音が響き俺は飛び上がる。

ついにこの瞬間がきてしまった。

俺は生唾を飲み込み、何度も飲み込み、扉へ向かう。

そして意を決して開いた扉の向こうに立つ女性を見て、俺は勝ったと思ったのだ。

部屋へと招いた女性は俺好みで大変可愛くこの興奮を誰かに伝えたくてしょうがない。

チェンジで手間取ったらどうしようかとか、本当にしてくれるのだろうかとか、俺にそれを言える勇気があるのだろうかとか、先ほどまで抱えていたそんな不安が一気に晴れる。

俺は勝ったのだ。チェンジの必要など無いのだ。

しかし、そんな勝ち誇った気分も直ぐに新たな不安で消え失せてしまう。

人間誰しも初めてはあるのだ。

たまたま俺の初めては今になってしまったというだけで、タイミングが悪かっただけなのである。

そんな言い訳を胸中でしてみたところで、この目の前にいる女性に笑われてしまったらと思うと不安の余り冷や汗が出てきそうだ。

だが、下手に見栄をはるよりかはと恥を忍んで女性に俺の事情を伝えたところ、少し驚いた様子ではあったが笑みを浮かべて了承してもらえた。

顔ばかりかプロポーションまで抜群で性格まで良いとは。

その後、彼女の『特別』なる心遣いで漸く魔法使いの道から離脱する事が出来たのだ。

そして俺は今、再び新たな不安を心中に抱えここに立っている。

あの時の彼女の心遣いは本当に『特別』で、普通では有り得ない事も重々承知している。

たまたま彼女の趣味というか性癖に、無知の俺が上手く引掛かっただけに他ならない。

彼女は時間の許す限り、初心者である俺に色々と教えてくれた。

本当に余計な事まで色々。

あの時の俺は緊張して浮かれていて、肝心な部分を聞き漏らしていたのだ。

その結果、俺はこの不安を消し去る為にこの場へ 新宿二丁目の入り口に今立っている。

生理的嫌悪があればきつと大丈夫。多分大丈夫。

余計な事まで色々と丹念に教えてくれた彼女は今、本当の『彼女』となれたのであろうか。

そんな事を思いながら、俺は一步を踏み出したのであった。

【第九回】 慈雨（前書き）

- ・ テーマ / 砂漠
- ・ 禁則事項？ / 擬態法使用禁止
- ・ 禁則事項？ / 擬人法（偽物表現も含む）使用禁止

【第九回】 慈雨

瞼を閉じれば、あたかも現存するかのように浮かぶ情景がある。幼き頃より繰り返し見るその『夢』は、歳を経て今なお多様に姿を変えるが本質は変わらない。

例えば。

見渡す限りの砂地は吹き荒ぶ風に砂塵が舞い上がり、僅か先の視界でさえをも隠してしまう。

シャツで口元を覆うが、隙間から潜り込んでくる砂に鼻や喉そして目を傷める。

居ても立つてもいられずにその場へ蹲って身を守ろうとするが、更に風は強まる一方で砂嵐となる。

身動きできない体に砂が積もり重なって、瞬く間に砂地の一部へととけ込んでしまう。

成すがままに砂を被り続け、熱した空気に肺は澄んだ酸素を、喉は清涼たる水を求めるが、粘つくように感じていた唾液さえもが枯れ果て、いくら舌を強張らせてみたくところで涸竭した口内は僅かな湿り気ももたらす事はない。

そして、訪れるのは音も無い真の闇。

例えば。

空を見上げれば雲ひとつ無く、灼熱な日差しで照り付けてくる太陽。

直視する事もできない日差しを受け、乾きにひび割れた大地を永遠と歩き続ける。

触れただけで脆くも崩れる枝の塊、そよとも風は吹かず、荒涼とした大地との境目は蜃気楼に揺らいでいる。

その揺らぎの中に浮かぶ一際濃い青を求めて歩き続ける。

希求し続けたオアシスだ。

しかし、それが逃げ水だという事も分かっている。

歩けど歩けど決して辿り着けない事を承知しながら、それでも飢渴さから歩き続けてしまう。

繰り返す踏み出す一歩が次第に重くなり、やがては片膝が地に突き、体が頼れ落ちてても手を伸ばして這い進む。

過酷な日差しに肌は火脹れを起こし、体の水分を全て失った後に訪れるのは音も無い真の闇。

夢として見る砂漠には、不安、孤独、絶望によるところが大きいらしい。

しかし、物心つく頃より繰り返す見る風景が、不安や孤独、絶望を感じたからとは思えなかった。

瞼を開けて訪れる現実と同時に襲ってくる飢渴感から、水を満たした浴槽に体を沈める事が日常となった。

最大の冷蔵庫だけでは収まりきらず、自宅にウォーターサーバーまでも置いて渴きを凌ごうとするが満たされた事はない。

飲めるだけの水を飲み、そして吐いてしまう。
当然だ。

実際の体は水を求めている訳ではないのだから。

時には岩石であり、礫であり、砂や土へと景色を変えながらも耐え難い飢渴をもたらすそれらの場所へ一度として訪れた事はないし、そもそも現存する場所なのであるかも疑わしい。

だが、砂の一粒でさえもが現実味を帯びている。
ならば前世の記憶によるものかと思いましたが、

神経科学、心理学を学びながら宗教にも没頭した時期はあったが、結果としては徒勞であった。

何一つ、納得のいく回答は得られなかった。

何を試しても渴きが癒される事はなかった。

一度として満たされる事なく、このまま一生を終えるのだろうか。今では真実となった絶望を抱きながら、今宵も音の無い闇へと堕ちていく。

景色が変わった。

砂塵吹き荒ぶ乾いた景色に、灼熱とした太陽の光が照り付ける景色に、そしてひび割れた大地と逃げ水が漂う景色に、初めての雨季が訪れた。

一度として痛みや熱を感じた事はなかったのに、雨の痛みはなんと柔らかくて温かく感じる事だろうか。

両手を広げ全身に降り注ぐ恵みを受ける。

肌だけではなく体の内からも満たされようと、口を限界まで開けて喉を潤していく。

乾涸びた細胞までもが潤い満たされていく気分自然と頬が緩み、声を上げて笑いながらまるで子供に返ったかのようにはしゃいで辺りを駆け回った。

走る先々の全ての場所で雨が降りしきる。

髪を濡らし、服をも濡らし、乾涸びていた大地に跪き、幾つもできた小さな水溜りを両手で掬い顔面に擦り付けた。

気の昂ぶりのままに天を仰いで哄笑し続けていたが、やがて雨は勢いを弱め、そして止んでしまった。

太陽を隠していた暗く厚い雲が勢いよく流れて行くのが見える。

雨季は去り、再び乾季が訪れたのだ。

瞼を開けると直ぐ前には白目を剥いている少女がいた。

両手は背後でまとめられ、括った両足は梁から吊り下げられている。

両方の耳の下を繋ぐようにして切り裂かれた喉の奥には白い骨が

覗き見え、夥しく溢れ出た血に少女の顔は赤く濡れている。

その目は既に生気を失い、脈を打っていた鼓動は止まっている。
血潮は切り裂かれた喉から全て出ていつてしまったのだから。

肌がふやけるほど水に浸り、吐くほどに水を飲み続けて尚、一度として渴きが満たされなかったというのに彼女のお陰でかつて無い充足感に満ち溢れている。

感謝を込めて彼女へ口付けた。

両頬を手で挟み、だらりと垂れ下がった舌を絡ませて、擦り合わせ、嘍り上げる。

口腔に溜まった分も余す所なく嘗めつくし、赤く汚れた顔も丹念に舐めていく。

もう二度と飢渴に絶望を覚える事は無い。

これからはいつでも恵みの雨を得る事ができるのだから。

僕の三十日戦争はこうして始まった。

『藍浦 碧 様』

どうしてもお伝えしたいことがあります。

本日ホームルーム終了後、図書室（日本文学棚の前）にてお待ちしておりますので、くれぐれもお一人で、誰にも知られず気付かれぬよういらしてください』

梅雨らしく雨がシトシトと降っていた朝、登校して濡れた傘の雫を払って靴を履き替えようと下駄箱を開けたところ、上履きの上に薄いピンク色の封筒が乗っていた。

中を見れば封筒と同じ色をした二つ折りのカード、縁には波のようなラインが箔押しされていて、少し丸みを帯びた可愛らしい文字やこの封筒とカードを選ぶあたり、差出人は女の子だろうと予想する。

と同時に、毎週上履きを洗っていて良かったとも思った。

今日はたまたまタイミングがよく、普段乗る一本前のバスに乗り込めたから少し早く学校についたのだ。

そのおかげで、下駄箱はまだひと気もまばらだから挙動不審な僕を気にする人はいない。

ラブレターなんて初めて貰った。

いや、内容はただの呼び出しなのだからラブレターとは言えないか。

しかし、この流れだと漏れなく告白と想ってもいいよな？

誰にも内緒でこっそり来てとか、恥ずかしいからか？

どんだけシャイっ子なんだよ。

そんなふうに出ることを考えていると頬が勝手に緩んでくる

から大変だ。

こんな締めりのない顔を友達に見られたら何を言われるか分かったもんじゃない。

握った手で口元を隠しつつ普段の顔でなければと思えば思うほど、口の端がどうしても緩んでくる。

どう見ても怪しい人だ。

時間はまだ余裕があるし、トイレに籠って思う存分ニヤニヤしてしまっただ方がいいたろうか。

女の子（仮）から手紙を貰ったのなんて初めてで、浮かれてしまうのかもしれない。

その日はクラスメートから不審に思われないようにと頬をしきりに擦りながら、カードの差出人を思っては落ち着きない一日を過ごしたのである。

授業中に先生から注意されること六回、友達から怪しまれること二回、なんとかやり過ごしてやっとの放課後だ。

いつもは途中まで一緒に帰っている友達へ、今日は用事があるからと教室で別れる。

ゆっくりと帰り支度をしながらなんとはなしに人が減るのを待つが、土曜日だから授業は四限までだし、明日は休みということもあってかそう待たずに教室は数人を残すだけとなった。

何気ないふうを装いながら鞆を手に取り教室を出て、図書室のある二階へと下りて行く。

扉を開けて室内を見渡すと、ここもそう人は多くない。

指定された『日本文学』の棚を探しながら向かった先は、部屋の隅に設けられた場所で他のジャンルの棚と棚とで絶妙な死角になっていた。

これはますます興奮　でなくて、期待が高まるといふものだ。

しかし、日本文学の棚へ着いたのはよいが、シャイっ子さんどこ

るか誰もいない。

時間が早すぎたのだろうか。それとも遅くなってしまった？ もしかして僕は担がれたのか？

呼び出されたから、てつきりシャイツ子さんは待ってくれているものだとはかり思っていただけに僕の落胆は激しい。

もしこれが冗談で、誰かがどこかで僕を見て笑っているのならばかなり恥ずかしい。

僕は情けないやら拍子抜けするやらで肩を落しながら帰ろうと踵を返した。

そこへ、静かな図書室らしく潜めた声で呼びかけられたのだ。

「二年一組出席番号一番の藍浦 碧君？」

「あ！ はいっ！ 僕が藍浦です」

返事をしながら声のした方を見ると、棚を挟んだ向こう側にシャイツ子さんが立っていた。

棚板と本の隙間から見えるのは、項を隠す染めていない艶やかな黒の髪だけ。

ゆいつ彼女をうかがい知れる声は少し高く、勝気そうな性格を想像させた。

棚を一つ挟んでいるのに、小声でもよく聞こえる。

「帰宅部で間違いはないわね？ 誰にも気づかれずにここまでこれた？ 誰にも言っていないわよね」

「はい、帰宅部の藍浦です。カードにはそう書いてあったので誰にも言つてませんし、たぶん気づかれてないと思いますけど」

彼女は未だに後姿のまままで振り返ってくれないし、棚を指定しておきながら何で違う棚にいるわけ？

「あの……」

「無駄口は叩かない。質問は後で受け付けるわ。あなたに与えられた時間は五分よ。速やかに行動しなさい。まずは、夢野久作の本の奥を確認して」

シャイツ子さんは小声だけれど有無を言わせない口調だ。

何が何だかさっぱり分からないんだけど、取り合えずは言うとおりにと日本文学の棚を振り返る。

目の前には夏目漱石の名前が並んでいた。思わず人差し指で辿っていると、シャイツ子さんから叱咤が飛んでくる。

「ユなんだから下に決まってるでしょ！ お馬鹿さん！」

初対面の人にお馬鹿さん呼ばわりされた。

入学してから図書室なんて利用したことないし、夢野久作の位置なんて知らないんだけど……なんて言い訳ができる雰囲気ではない。これ以上怒られないようにとその場でしゃがんで見てみれば、確かに一番下には夢野久作が並んでいる。

本を取り出して覗いた奥には、生徒手帳サイズの小さなメモ帳があったので取り出してみた。

「おめでとっ」

本を戻して立ち上がる僕にシャイツ子さんが笑い混じりで囁く。

「おめでとっ……」。

「……まさかっ」

思わず声をあげそうになって既でで堪えた。

慌てて手元の手帳を見ると、その表紙には『部活費補助制度』と書いてある。

「そのまさかよ。明日の六月一日からあなたが一ヶ月ジョーカーよ、か、も。スペシャルジョーカー」

畜生、騙された！ 愛の告白じゃないのかよっ！

思わせぶりな手紙出しやがって！ 身も心も清く美しい僕の純情を返せっ！

「部費争奪戦の切り札であるジョーカーに一ヶ月任命されました。詳細はその手帳に書いてあるから熟読しておいて。あと、次のジョーカーへの引継ぎについては、生徒会から何らかしら接触してくるのでそれに従ってね。何か質問はある？」

「……名前だけ知ってますけど、実際にルールとか詳しくは知らない

いんです」

今度こそ本当に僕はがつくりとうなだれて肩を落とした。

部活なんて面倒だから帰宅部であるというのに、こんな隠れイベントがあるなんて知らなかった、知ってたら他の学校にしたのかもしないのに。

とは言っても今更なので頑張らなければならない。

部外者にとつては平穏な日常の水面下で、熱く戦う連中がいるのだという噂だけなら知っているけれど、実際どういった戦いなのか今までの僕には無縁だったので知らないのだ。

まさか、この僕が当事者になるなんて思いもしなかったし。

「そうね……クラブの予算は生徒の自主性を育てるといふ学園の方針から、生徒会が一任されていることは知っているかしら？ あらかじめ学園から割り振られた予算を元に二月末に行われる予算会議で詳細が決められるの。当然クラブ側もより多くの予算確保に乗り出してくるわけなんだけど、その会議でいちいち論じていたら埒が明かないでしょ？ 速やかに予算を確定するために、各クラブへ生徒会から試練を与えられているのね。それがジョーカー。ひと月に一人、一年で十二人のジョーカーを生徒会が帰宅部の生徒からランダムに選んでいるの。ベースとなるクラブ予算費はそう多くはないのだけれど、ジョーカーを獲得することでその予算が増えるってわけ。流れはお分かり？」

よどみない彼女の言葉を頭の中で反芻しながらささくなく頷く。

要は部費をかけた鬼ごっこで、僕は一ヶ月間逃げ続ければいいのだ。

激しく面倒なんだけど……って、あれ？

「あの、参考までにわざと捕まったりとかって……」

「お勧めしないわ。ジョーカーの証であるその手帳は一ヶ月間、肌身離さず持ち歩くことが原則。体操着に着替えるときもね。どうするかは自分で考えて。もちろん、手を抜いてさっさと捕まってしまう

ったほうが楽だと思う人がいるでしょう。でも、捕まったジョーカーがどうなるのかは……あなたも、今月の始めにも流れた悲惨な放送は聞いたでしょ？」

彼女はやはり背を向けたままだったけれど、その哀れみのこもった言葉に僕はしつかりと頷いた。

二年五組某氏の赤裸々なプロフィールが、昼休みのあいだ予鈴が鳴るまで放送され続けていたのだ。

生まれたときからのエピソードに始まり、幼稚園時代の初恋、小学校時代のお漏らし事件、中学時代では振られた回数やその状況までもが事細かに、いつたいどんなイジメなんだよと。

むしろ、どうやってそれらの情報を集めてきたのか、生徒会が恐れられている所以でもある。

なにせ、今月の分を入れて僕が聞いた放送は六回だ。

「うっかり家に忘れたとか、授業の移動で鞆に入れっぱなしだったりなんて言い訳も通用しないわよ、その手帳GPS搭載だから」

「マジっすか?!」

思わず食いついた僕に、彼女はそっけなく肩をすくめた。

「冗談よ。とは言っても、生徒会と科学部がかなり懇意にしているらしいから、何か手は打ってあるんじゃない？ でなければ、こんな面倒なこと強制させたりしないでしょ？」

言われてみればごもつともである。

が、その辺は裏の裏を搔く心理作戦なのかもしれないが、試してみるには校内放送というリスクは大きいと思う。

それに、生徒会とか科学部って妙に金持ってそうだから、本当に小型のGPSが埋め込まれてるかもしれないし。

「ジョーカーのペナルティや心得なんてことも手帳に書いてあるわけで、その手帳を奪われて生徒会へ提出されたらアウトよ」

「だいたいの流れは分かりました。それで、スペシャルジョーカーって何ですか？」

「ああ、それはね。通常のジョーカーに比べて、配当率が高いのが

スペシャルジョーカー。なんと、三倍！ スペシャルがいつ回ってくるかは生徒会の気分次第、というよりもプールされていた予算が貯まったから放出するというのが本当のところらしいけれど。まあ、スペシャルであるうとなかろうとジョーカーの数で部費が増えるし、彼らの熱意に大差はないけれどね。身包みはがされないように気をつけて？」

以前、柔道部と思わしきむさい先輩方に囲まれて、制服を剥がされている男子生徒を見かけたことはあったがそういうことだったのか。

恐ろしい。

「五分経ったから私は行くわ。あなたは更に数分待ってから図書室を出るように」

「え、何ですか？」

「だいたい、何でこんなスパイゴッコみたいなのをしているんだ？」

「やだ、一緒に帰りたいの？」

思わずとばかりに彼女が笑いながら聞き返してきた。

一瞬、振り返りそうになったときに見えた耳の形がちょっと可愛いなんて思っちゃったりして。

「いや、そういうわけじゃ……えっと」

「冗談よ。まあ、どこから情報が漏れてるのか知らないけれど、私が今回のジョーカーと接触するかもって気づいている人もいるのよね。だから、念には念を入れて、ね？ こんなことであなかも初日から捕まりたくはないでしょ？」

「はあ、気を使ってもらってますいません」

「……できれば放送であなたの恥ずかしい過去なんて聞きたくはないし？ 無事に今月を乗り切ったら、今度こそちゃんと顔見て話もしたいし？ あなた、結構タイプだし……まっ、健闘を祈ってるわ」

え？ えっ？！ 今なんと？！ もう一回言っ、もう一回！

慌てて本棚へへばりついた僕が最後に見れたのは、「じゃあね」

の言葉とともにひらひらと揺れる彼女の白い指だった。

こうして、僕と全クラブ部員による三十日戦争の幕は開いたのである。

電子牡丹灯籠（前書き）

夏のホラー2011の企画を見てつらつらと

電子牡丹灯籠

カラリ、コロリと聞こえる音に目が覚めた。

いつから聞こえていたのか、不思議と思ひ横へと寝返りながら耳を澄ます。

電源の落ちたモニタに小さな明かりが映りこんでいるのが見えた。右の左上に映り込む小さな明かりは、再びカラリ、コロリ、と聞こえた音に合わせて右へ、左へ、と微かに揺れる。

寝る際には明かりを全て消し、光が差し込まないよう厚いカーテンを閉めてあるというのに、モニタに映り込む光はこの明かりだろうか。

一度疑問に思うと背筋が薄ら寒く感じ、モニタから目が離せなくなつた。

カラリ、と明かりが右に揺れ、コロリ、と明かりが左に揺れる。暗いモニタの中にある一点の明かりが音に連れて心做しから大きくなっているように見える。

大体この音は一体どこから聞こえてくるのだ。
窓の外からではない。

下駄を履いた足がゆっくりと歩を進めるように間延びした音だ。
カラリ、と音が聞こえる。

モニタからだ。
ゆっくりと布団を引き寄せ見開いた目だけはモニタを見つめて息を凝らす。

最初は小さな光だったのに、画面の中央までやってきた明かりはここから見ると五百円玉の大きさになっている。
明らかに近づいているのだ。

この明かりはこのままどこへ行くのだろうか　恐ろしさに身を強張らせながら様子を見てみると、明かりは向きを変えて画面の左へと移動していく。

間際、赤い地に真っ白な牡丹の描かれた振袖の裾が見えた。
カラリ、コロリ、右へ揺れ、左へ揺れ、明かりは徐々に小さくな
りモニタの左側へと消えてしまった。

あれは一体なんだったのか。

再び現れたらと思うと、結局まんじりともできずに朝まで過
てしまった。

鉢割（前書き）

「晩夏の三日月を見上げ杯を交わす二人」というシチュエーションを200文字で表現しようという路傍之杜鵑氏の「二百文字小説企画E's」を見てつらつらと

鉢割

ようやく色付き薄紅となつた朝顔と、初月を肴に唐津皮鯨へ注いだ酒をやる楽しさは格別である。

朝顔のたおやかな花弁を褒め、きゃしゃな蔓をそつと指先でなぞり、瑞々しい葉をそろりと撫でててやれば更に色を増すのもいじらしい。差しつ差されつ山杯を交わし、儂げな初月が顔を隠す頃、ほんのりと甘い香りを放ちほろ酔いとなつた朝顔をかいなに抱いて新鉢を割る。

薄紅から緋へと色を変えた朝顔に、これだから鉢を割るのは止められないと思うのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8535o/>

企画掌編集

2011年10月5日03時26分発行